

人事記録から見た秋田藩戊辰戦争

畑 中 康 博

はじめに

本稿は慶応四年（一八六八）の秋田藩戊辰戦争を藩庁軍事方の役人がつけていた日記から論じるものである。^①これまで幕末秋田藩の研究は数多くなされてきたが、その論点は秋田藩の藩論の転換や戦争に至る過程、そして思想的な背景が中心だった。^{②③}その一方で、戦争そのものに着目した研究は少ない。^④

昨今の戊辰戦争研究では、軍事史の視点、特に銃器の発達段階から戦争を捉えたものが発表されている。^⑤すなわち戦争の勝利は、球弾を使用した前装式滑腔銃から椎の実型弾丸を用いる後装式施条銃に装備を改変した部隊をどれだけ戦力化できたかにかかっていたというのである。銃器の発達段階か

ら秋田藩戊辰戦争を見た場合、同藩が戦争に弱かった要因を説明する論理として、確かに説得力はある。

慶応四年（一八六八）秋田藩は奥羽鎮撫総督から庄内出兵を命じられたことで、四月から五月、七月から九月の二度にわたり戦端を開いた。このうち四月の出兵は庄内藩のみを相手にしたものだったが、七月以降の戦いは、攻撃対象の庄内藩に加え、秋田藩が奥羽列藩同盟を離脱したことへの制裁として仙台藩・盛岡藩が攻め込んできたため、領内で激しい戦争になった。秋田藩の部隊は局地的に勝利することはあったが、庄内藩・仙台藩の部隊に翻弄され、九月になると久保田城下近くまで攻め込まれた。

出兵した秋田藩士の装備を日記や書状から見ると、彼らの姿は具足を着用した前時代的なものだった。^⑥だが幕末秋田藩

は軍事改革を行わなかったわけではない。⁽⁶⁾ 吉川忠行・忠安親子は文久年間にはゲベール銃を製造し、横手給人の間では吉川門人となる藩士も相当数いた。⁽⁷⁾ 藩は元治元年（一八六四）吉川流砲術の私塾を藩の砲術所とすることを決め、本格的に軍事改革に着手した。だが吉川親子が目指したのは自前で量産したゲベール銃を藩士に担わせ、戦力化することにあつた。その意図はある程度達成され、戊辰戦争時にはゲベール銃を装備した「遊撃隊」「有志隊」が出陣している。⁽⁸⁾ だが慶応四年になると前装式のゲベール銃は完全に時代遅れで、秋田藩の部隊は、後装式施条銃を装備した庄内藩兵の散兵戦術に終始圧倒された。言うならば、秋田藩士が立った戦場は、自分の持つ銃の射程圏外から命中率の高い銃で撃ちすくめられる連続だったといえる。

大坂冬の陣以来戦争を経験することのなかった秋田藩士が、旧式の武器を携えて戦場に駆り出され、戦闘を行う。その時彼らはどうのような行動をとったのか。本稿はこの点を明らかにすべく、秋田県公文書館所蔵佐竹文庫「御軍事總草稿」・「御軍事方日記写 御軍事總草稿」・「御軍事總大草稿」・「御用所御軍事總草稿写」から戦争時の秋田藩士の動きを見る。⁽⁹⁾ ではここで日記の記載形式を確認しよう。

〔史料1〕⁽¹⁰⁾

二月廿六日

一軍将・檢使并御物頭、於御政務処、老中直々申渡。
但、軍将・檢使は武者奉行御手紙、御物頭は係奉行副
役より切紙才足之事
一組頭・旗奉行以下惣御人数、於御広間、多仲・喜左衛門
立会申渡之。

但、多務二付、廿六日・廿七日両日ニ被仰渡之。
被仰渡振り別紙之通

眞壁安芸
宇都宮四郎
小場小伝治
大越源十郎
梅津小太郎
洪江内膳
右は軍将被仰付之

右は洪江内膳手檢使被仰付之

右は小場小伝治手同断

小貫又三郎
洪江兵部
小田野刑部

右は宇都宮四郎手同断

右は真壁安芸手同断

中安泰治

これは慶応四年二月二十六日の日記で、真壁安芸ら六人の軍將の任命、小貫又三郎ら四人の検使の任命が記されている。筆者は、十人の辞令を一〇項目として数え、この作業を軍事方日記九冊に行った。その結果、慶応四年（一八六八）二月三日から九月二十九日までの全項目数は四二三八項目となった。（表一）

九冊の史料は、書き始めと書き終わりの時期が重複しているものがあり、同一の事項が二つの日記に記載されている場合がある。そこで四二三八項目から重複事項を統合し、かつ出陣に関する事項のみ抽出する作業を行った。その結果、慶応四年二月三日から九月二十九日に至る二一八二人の行動を見ることできるようになった。これはいわば戊辰戦争に参加した秋田藩士の人事記録である。

秋田藩軍事方が記録した二一八二人の人事記録。本稿は、このデータから出陣部隊の編成、出陣した藩士の動き、低下した戦力を回復させる取り組みの三点の視角から戦争の様相を見ることにしたい。

〈表 1〉軍事方日記の抄録一覧

史料名	資料番号	内容始まり	内容終わり
御軍事總草稿	AS212.1-11-2	2月3日 戸村十太夫武者奉行任命 から	閏4月16日 杉原繁治、真壁安芸大番頭洪江武之助員役任命
御軍事方日記写 御軍事總草稿 一	AS212.1-56-1	2月26日 真壁安芸ら6名軍將任命	閏4月16日 石井直治、洪江武之助手金鼓任命
御軍事方日記写 御軍事總草稿 二	AS212.1-56-2	7月6日 荒川久太郎、遊撃隊出撃	7月26日 小人力三郎、統一挺下賜
御軍事方日記写 御軍事總草稿 三	AS212.1-56-3	8月1日 米町格平、三卿本陣へ酒2石献上	8月30日 玉泉寺、行方不明
御軍事方日記写 御軍事總草稿 四	AS212.1-56-4	9月1日 根本七兵衛、風毒煩により畑宅	9月4日 金 弥市（記載なし）
御軍事總大草稿	AS212.1-66-1	4月15日 洪江内膳、御先手大沢口一番手軍將任命	7月1日 跡部重太郎、沢副総督を六道辻で出迎え
御用所御軍事總写 一	AS212.1-66-2	7月7日 小野崎三郎、軍將洪江内膳手番頭として、辰刻、新屋口へ出陣	7月29日 力三郎、津輕吹浦表で格別辛勞につき沢より分捕の銃1挺下賜
御用所御軍事總写 二	AS212.1-66-3	8月1日 米町格平、三卿本陣へ酒二石献上	8月30日 石川舍人三男石川伝三郎、8月29日道川村で戦死
御用所御軍事總草稿写 三	AS212.1-66-4	9月1日 根本七兵衛、風毒煩により畑宅	9月29日 能代庫之助、9月20日比内赤沢薬師森で戦死

1 部隊編成の特質

秋田藩の部隊編成は「史料1」に示したように、慶応四年（一八六八）二月二十六日の軍将・検使・物頭といった幹部クラスの人事任命から始まった。これは同年一月十六日、新政府から会津藩への出兵に備えるよう命じられたことによる。

ところが幹部以外の人事任命は一ヶ月以上遅く、部隊の火力の中心である鉄砲与力や特殊技能を必要とする貝役の任命は四月三日から、そして最前線で戦う戦士の任命は出陣直前という具合に、役職の上から段階的に辞令が下された。（表2）

秋田藩の軍事出動は、四月六日、仙台で下参謀大山格之助と世良修蔵が秋田藩の川井小六と岡内之丞に庄内出兵を命じたことから、会津藩から庄内藩へ攻撃目標が変わり、四月十六日の渋江内膳軍の出陣となる。そこで慶応四年（一八六八）四月に庄内藩攻撃のために出陣した各部隊の人事任命の記載日を細かく見てみよう。（表3）

やはりどの部隊も、最も人事任命が多いのは出撃当日の戦士の任命である。ただし、これは出撃当日に日記に記載されたためと考えられる。

だがこれは軍事方の記録上の問題ではない。戦士として出陣した藩士の日記を見ると、皆一様に出陣直前に任命を受け、

〈表2〉秋田藩出撃部隊の人事任命

2月26日 軍将・検使・物頭・小荷駄奉行の任命	
〈軍将〉	真壁安芸・宇都宮四郎・小場小伝治・大越源十郎・梅津小太郎・渋江内膳
〈検使〉	小貫又三郎（渋江手）・渋江兵部（小場手）・小田野刑部（宇都宮手）・中安泰治（真壁手）
〈物頭〉	根本慎蔵・平元 均・下山田直記・蓮沼七左衛門（小場手） 椎名勇之進・石井鏑殿助・赤須哲三郎・中山隆吉（宇都宮手） 信太 勇・佐藤才記・大越源右衛門・鷲尾庫之助（真壁手） 宇佐美慶吾・黒沢采女・大越強太・伊藤保吉（渋江手）
〈小荷駄奉行〉	江間伊織（評定奉行・軍事方）
4月3日 鉄砲与力・遊軍頭・貝役の任命	
〈鉄砲与力〉	高階頼負など12名
〈遊軍頭〉	小野崎三郎・荒川久太郎・疋田八弥・介川敬之進
〈貝役〉	斎藤政之助（小場手）・設楽和一郎（真壁手）・浅野銀太郎（山方手）・船木甚一郎（梅津手）
4月15・16日 渋江手戦士の任命	

慌ただしく出陣していることがわかる。その例として横手給人妹尾五郎兵衛をあげる。妹尾は慶応四年四月十六日、軍将梅津小太郎の部隊として出陣が命じられた。彼は出陣が命じられた翌十七日、役所（横手にある藩庁の出先機関）へ次の伺いを提出している。

〔史料2〕

御伺覚

一私共供人三人と被仰渡候得共、兼て抱置候下人一人御座候。残二人他より雇入不申候得は相成不申候。此節柄雇入兼候哉も難斗、又は広大之給金にて自力に及兼候節は

〈表3〉秋田藩各部隊の人事任命の月日

	御先手大沢口		大沢口二番手		新屋口一番手		新屋口		土崎湊	
	浪江内膳	小野崎三郎	梅津小太郎	疋田八弥	小場小伝治	梅津千代吉	佐竹大和	荒川久太郎	真壁安芸	浪江武之助
		浪江軍番頭		大沢口遊軍		小場手番頭		遊軍頭		真壁手番頭
2月26日	4	1	1		6	2			5	1
3月25日					1					
3月26日					1					
3月27日			2				1			
4月 3日	7	6		1		2		1		1
4月 4日	6	2							1	
4月 6日	6	2	8			1				
4月 7日		2							1	
4月 9日		10			1					
4月10日		7			2					
4月11日	2				1	1				
4月13日	1				1				3	
4月14日	1		1		1		1			1
4月15日	11	2	2		3	1				
4月16日	103	37			9	1				2
4月17日					1					
4月18日	3				9				21	
4月19日			1							
4月20日			12	2	1				3	
4月21日						1				
4月22日					1	12			1	16
4月23日	1				4	7	1		1	
4月24日				4		1				
4月25日			1		7	5			1	
4月26日						1	2			
4月27日			105	45	98	40	1	1		
4月28日					1			10		5
4月29日							126	100	1	1
閏 4月14日									2	
閏 4月16日	1		1						75	28
総計	146	69	134	52	148	75	132	112	115	55

網掛けは、その部隊が出撃した日

如何致候て可宜哉。

御附ケ札 供人減少不苦候。自力に相及兼候とも不被貸下候。

一具足並に持参之諸品仕送り方如何致候て可宜候哉。

御附ケ札 具足は手元にて持参可致候。諸品仕送りの

儀は、一人に付三貫目より不相成、右品小荷駄方へ可差出候。

一幕持参可仕候哉。

同 持参に不及候。

一乗馬並に馬具諸事無之候故、可被貸下候哉。

同 不被貸下候。

一徒具足持参可致候哉。

同 持参に不及候。

(傍線筆者、以下同じ)

ここで注目すべきは、三人の従者を率いて出陣することを経命じられた妹尾が、一人しか連れて行くことができないと述べている点である。これに対して、供人の減少は致し方ないとした藩の回答も興味深い。妹尾家が従者を揃えられないと申し出たのは、長らく続いた知行借上げにより、陪臣の数を減らしていたためであろう。たった一人の従者では、妹尾が戦場で着用する具足を運ぶこともままならない。そこで妹尾は、荷物の運搬を藩が行ってもらえないかと尋ねている。

加えて、妹尾は馬、馬具、従者の着る鎧、いずれも持っていないことがわかる。

従者の数に關して、人事記録から興味深いデータが得られる。慶応四年四月に出陣した〈表3〉の一二六名の藩士のうち、分限帳等により石高が判明する六八名の藩士を抽出したのが〈表4〉である。これを見ると、直臣が率いる従者(陪臣)の数は、直臣の禄の大小に関わりなく、役職で一律に決まっているという点である。〔史料2〕の妹尾五郎兵衛は六〇石、役職は使武者で出陣藩士は上下四人(妹尾本人と従者三人)である。しかし妹尾より高禄の内山宇左衛門(一〇三石)は、戦士なので出陣藩士は上下三人(従者二人)になっている。

江戸時代の武家社会を特徴づけるものの一つに軍役がある。これは、君主に仕える直臣は禄に応じて陪臣を多く召し抱えなければならぬというものである。しかし〈表4〉からは、この軍役システムが適用されていないことがわかる。

軍將たちへ下された辞令を見ると「当時之戦争砲術盛ニ相成候事故(中略)華美虚飾之風被相除、武備実用之手筈專要可被致候」という文言がある。藩庁上層部では、高禄の直臣が多く陪臣を召し連れて戦場に出て、銃撃戦が予想される戦場では役に立たないことを認識していたのである。直臣が陪臣を率いて戦場に赴くスタイルは武家の慣行に倣っているが、部隊内の役職で一律に陪臣の数を決め、冗員を不要と

(表4) 従者の人数

No	人名	現行役職・身分	所属部隊	所属分隊・身分	石高	従者の人数	出典
1	石川 東	財用奉行	浪江内膳	陣場奉行・小荷駄奉行	177	上下15人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
2	沼井市之助		浪江内膳	鉄砲物頭	318	上下7人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
3	宇佐美慶吾		浪江内膳	鉄砲物頭	203	上下7人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
4	大鶴源治	御目付	浪江内膳	目付	200	上下7人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
5	山県三郎	横手物頭	梅津小太郎	物頭	144	上下7人	横手郷土史
6	高屋五左衛門	横手物頭	梅津小太郎	物頭	148	上下7人	横手郷土史
7	山県三郎		梅津小太郎	鉄砲物頭	144	上下7人	横手郷土史
8	高屋五左衛門		梅津小太郎	鉄砲物頭	81	上下7人	横手郷土史
9	石川早人		梅津小太郎	組頭	55,791	上下6人	横手郷土史
10	鹿子畑新右衛門	佐竹三郎組下湯沢給人	疋田八郎	鉄砲頭	89	上下5人	横手市史
11	芳賀甚五右衛門	佐竹三郎組下湯沢給人	疋田八郎	鉄砲頭	77	上下5人	横手市史
12	桜井左源太		浪江内膳	使武者	225	上下4人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
13	練尾五郎兵衛	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	使武者	60,569	上下4人	横手市史・明細短冊
14	赤尾岡正助	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	使武者	49	上下4人	横手郷土史・横手市史
15	富永伊左衛門		浪江内膳	戦士	43	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
16	丹内貞之進		浪江内膳	戦士	45	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
17	田所主幹		浪江内膳	戦士	77	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
18	松尾敦太		浪江内膳	戦士	32	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
19	河村市之進		浪江内膳	戦士	17	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
20	藤井半三郎		浪江内膳	戦士	183	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
21	岡見藤治		浪江内膳	戦士	121	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
22	安立主馬		浪江内膳	戦士	25	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
23	打越安之助		浪江内膳	戦士	39	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
24	江田三之助		浪江内膳	戦士	185	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
25	大鶴源之助		浪江内膳	戦士	49	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
26	広瀬右馬助		浪江内膳	戦士	136	上下3人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
27	浅利長兵衛	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	1605	上下3人	横手郷土史
28	石井弥右衛門	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	111	上下3人	横手郷土史・横手市史
29	簡田野新右衛門	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	105	上下3人	横手郷土史・横手市史
30	須田勘兵衛	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	49,765	上下3人	横手郷土史
31	長沼五郎左衛門	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	48	上下3人	横手郷土史
32	石井藤馬	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	72,082	上下3人	横手郷土史
33	平塚金治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	11,988	上下3人	横手郷土史
34	岡 嘉左衛門	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	11,075	上下3人	横手郷土史
35	大森泰助	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	99	上下3人	横手郷土史
36	内山宇左衛門	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	103,487	上下3人	横手郷土史
37	小室藤十郎	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	80	上下3人	横手郷土史
38	安土市之進	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	76,243	上下3人	横手郷土史
39	八代周吉	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	57,877	上下3人	横手郷土史
40	石井平太郎	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	24	上下3人	横手郷土史
41	椎名雄之進	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	63	上下3人	横手郷土史
42	大賀資之助	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	60	上下3人	横手郷土史
43	堀 甚内	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	55	上下3人	横手郷土史
44	遠藤小十郎	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	28	上下3人	横手郷土史
45	掛札庄治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	20	上下3人	横手郷土史
46	高柳伝治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	38	上下3人	横手郷土史
47	椎名為之助	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	452	上下3人	横手郷土史
48	清川主水	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	44	上下3人	横手郷土史
49	菊地養助	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	441	上下3人	横手郷土史
50	本橋松治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	38	上下3人	横手郷土史
51	野上彦一	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	29	上下3人	横手郷土史
52	石井平平	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	37,563	上下3人	横手郷土史
53	遠藤新六郎	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	34	上下3人	横手郷土史
54	木村久蔵	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	29	上下3人	横手郷土史
55	石川此治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	199	上下3人	横手郷土史・横手市史
56	小味源直治	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	16,604	上下3人	横手郷土史
57	小野崎吉太郎	戸村十太夫組下横手給人	梅津小太郎	戦士	2,668	上下3人	横手郷土史
58	相沢四郎	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	旗付添士	10,925	上下3人	横手郷土史
59	石井藤助	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	役役	25	上下3人	横手郷土史
60	小川又兵衛	佐竹三郎組下湯沢給人	疋田八郎	旗付添士	5	上下3人	横手市史
61	金光十郎		浪江内膳	鉄砲与力	39	上下2人	小賈家文書・沼田家文書分限帳
62	小川清五郎	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	与力	10	上下2人	横手郷土史・明細短冊
63	面川忠右衛門	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	与力	7	上下2人	横手郷土史・明細短冊
64	小鷹源兵衛	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	旗付添士	13,566	上下2人	横手郷土史・明細短冊
65	金 寅吉	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	大馬印付添士	20	上下2人	横手郷土史・明細短冊
66	掛札長左衛門	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	金銀付添士	18,666	上下2人	横手郷土史・横手市史・明細短冊
67	椎名六郎兵衛	小鷹源太組下横手給人	梅津小太郎	小荷駄与力	10,578	上下2人	横手郷土史・横手市史・明細短冊
68	星 才助	佐竹三郎組下湯沢給人	疋田八郎	鉄砲与力	24	上下2人	横手市史

小賈家文書「羽州庄内爲御征討御先手一番手御軍制」(国文学研究資料館 25-C-373)、「庄内御征討出張記録」(「横手郷土史資料」11)、沼田家文書「安政二年秋田藩幕高調」(「石川敬定庄内出張日記」(「横手市史 史料編 近世Ⅱ」 P682)、「土族卒明細短冊(横手分)」(秋田県公文書館)を参考に作成

したのは現実的な判断といえる。

だが、妹尾五郎兵衛のように規定の人数を率いて参陣することができない藩士がいたということは、既に同時代において、一体何人の人が出陣したのか、正確な数字が分からなかった可能性が大きい。

以上、本節では藩士の部隊編成を辞令の日取りから見た。その結果、辞令は部隊の役職の上から順に下され、戦士クラスは出陣直前であることが確認できた。出陣命令の直後に戦場に出なければならぬ戦士クラスの藩士は、武器の調達や従者の手配に十分な時間を割くことができなかった。そのため、出陣した秋田藩の部隊は装備が十分でない歩兵を中心とした部隊で、しかも書類上より人数が少なかったと考えられる。

2 出陣藩士の選定

では出陣藩士の選定は、どのようになされたのか。この問題を軍事方日記の記載から考えてみたい。

次の史料は、三月二十六日、軍将洪江内膳へ刈和野給人を指揮下に置くことを命じたものである。

〔史料3〕

洪江内膳

此度 御親征之義被 仰出候二付 御沙汰次第 御出陣被遊候御場合ニ被為至、猶羽州一國御鎮撫御応援二付、何れ之向え也共御人数被差出候御取調二付、組下刈和野給人并支配御足輕共別紙之通遊軍ニ被御付、御沙汰次第出張可被御付候間、此段可被申渡候。此節柄ニも候間、花美虚飾之風被相除、武備実用之手筈專要ニ致、御境向御取締之筋厳重相心得、兼て操練無怠、異変之節一方之御用ニ相立候様一統え可被申渡候。

三月

ここで注目すべきは、傍線部「別紙之通」である。この「別紙之通」の文言は、同日の梅津小太郎・大越源十郎・小鷹狩源太・今宮大学への辞令にも共通する。大越源十郎への命令を見てみよう。

〔史料4〕

大越源十郎

右同断（沙汰次第出陣）ニ付、戸村大学与下横手給人之内別紙之通附屬被仰付候間、御沙汰次第右人数引具出張可被致候。尤、右之段大学え被仰渡被差置候。操練之義は同人え相任候。此段可被相心得候。

三月

軍將の任命を受けた大越源十郎は久保田給人で、大越が率いる戦士は横手給人である。大越は横手給人とは普段何の関わりもない。それゆえ軍事方は大越に配下になる予定の横手給人の名前を記した「別紙」を渡すのである。つまり軍將が自らの軍に属する配下を掌握するのは「別紙」を受け取ることによってのことである。

先に鉄砲与力、戦士の人事任命は四月に入ってなされたと述べたが、他人との交換で配属される藩士がいたことが次の辞令から確認できる。

〔史料5〕⁽¹⁸⁾

右は大久保久太代、渋江内膳手鉄砲与力にて御物頭宇佐美慶吾え被属置候段同人立寄申渡之。

九番 内海鉄治

右は吉川藤右衛門代、右同断

皆川恭蔵と内海鉄治への辞令を見ると、二人とも本来入るべき人物の代理として渋江内膳の部隊の鉄砲与力に任命されたことがわかる。皆川や内海のように本来入るべき人物の代わりとして任命がなされた場合、元々予定されていた大久保久太や吉川藤右衛門のような人物はどこへ配属されたのかを追ってみた。(表5)

すると部隊編製の過程で最も人が入れ替わったのは、十二人の予定者が入れ替わった小場小伝治の部隊だということがわかった。十二人の内訳は、佐竹大和、小野崎三郎、真壁安芸の部隊に一人ずつ異動、三人が部隊内での役職変更、そして六人が配属先なしだった。そこに宇都宮四郎、山方志摩、小野崎三郎、信太内蔵助、真壁安芸から十一人が入っている。代理人が入るも次の配属先がない人、これはすなわち、従軍できない何らかの理由があるか従軍を忌避した人であり、全部隊で四十五人いる。多い順に小野崎隊・渋江内膳隊が八人、渋江武之助隊・小場隊が六人となっている。

軍將に「別紙」として配下となる戦士のリストが渡されるのが三月二十六日、鉄砲与力の辞令が下されたのが四月三日、渋江内膳軍の出撃が四月十六日である。幹部と戦士との辞令の時間差は、不要と見なした人物を抜いたり、必要とする人物を他の隊から引き抜く作業を行った時間ともいえる。

以上本節では、辞令の文言から秋田藩の部隊編制の特質を考察した。その結果、慶応四年四月の庄内出兵に出陣した藩士一〇三八人中、編制途中で部隊から外された、若しくは外してもらったよう図ったのは四五人、当初の予定者の代理として辞令が下りたのが四〇人いたことが確認できた。これは出陣藩士の八%にあたる。ここから秋田藩の出陣部隊の編制は円滑に進行したわけではなかったことを指摘することができ

(表 5) 代理人が入ったことによる元の人物の配属先

	配属先											総計
	なし	宇都宮 四郎	大和 佐竹	内膳 江	武之助 江	小場 伝治	小野 崎三郎	信太 内蔵助	真壁 安芸	梅津 小太郎	梅津 千代吉	
宇都宮四郎	3					3				1	1	8
佐竹河内	1											1
山方志摩						1						1
内膳江	8			2					1		1	12
武之助江	6				2				1			9
小場伝治	6		1			3	1		1			12
小野崎三郎	8					2	4					14
信太内蔵助	5				1	2		1				9
真壁安芸	2					3			2	1	1	9
多賀谷長門	1											1
梅津小太郎	1											1
梅津千代吉	4	1		1	1						1	8
総計	45	1	1	3	4	14	5	1	5	2	4	85

る。

3 出陣藩士の動向

次に二一八二人の人事記録から、戦死者、負傷者、そして様々な理由を申し立てて戦場からいなくなる戦場離脱者の数から秋田藩戊辰戦争の様相を見ることにしよう。

まずは戦死者・負傷者・戦場離脱者の数を〈表6〉に、累計を〈グラフ1〉に示す。

戦死者の数を見ると、八月十一日、十三日、九月八日に突出して多いことがわかる。これは横手籠城戦、角間川の戦い、福部羅の戦いが発生した日である。

負傷者の数は、軽い手傷を負った程度の者ではなく、重傷を負い帰宅するか病院へ行った者の数である。負傷者が急増するのは、戦死者同様八月十一日・十二日である。その後、負傷者が断続的に微増するが、これは負傷者が前線から自宅又は病院に戻り、自分又は家族が軍事方に報告するためである。

ここから秋田藩戊辰戦争における秋田藩の部隊は、各戦線で断続的に戦死者を出して戦力を減らしたわけではなく、決戦に敗れることで著しく戦力を低下させたといえる。

各部隊の戦力低下に拍車をかけたのが、戦場離脱者の増加

〈表6〉戦死者・負傷者・戦場離脱者数

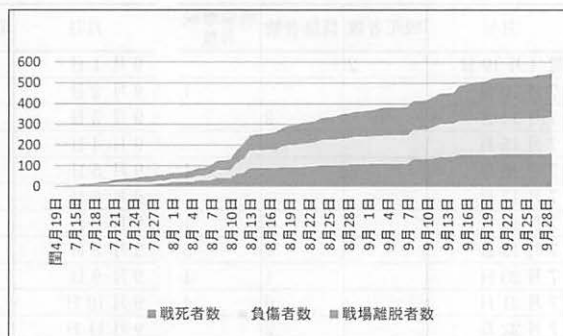
月日	戦死者数	負傷者数	戦場離脱者数
閏4月19日	2		
7月10日			1
7月14日		2	
7月15日			
7月16日	6		1
7月17日			
7月18日		1	1
7月19日		1	5
7月20日		1	1
7月21日		6	4
7月22日		2	
7月23日		2	2
7月24日			1
7月25日			5
7月26日			5
7月27日			
7月28日	6		2
7月29日			
8月1日	7	2	
8月2日		1	
8月3日		1	1
8月4日		4	4
8月5日	8	1	2
8月6日	1		1
8月7日		9	4
8月8日	11	7	3
8月9日		3	3
8月10日			3
8月11日	21	13	10
8月12日	5	15	11
8月13日	23	15	2
8月14日		4	3
8月15日			2
8月16日		2	1
8月17日			6
8月18日	3	13	2
8月19日		6	6
8月20日		1	3
8月21日	1	4	4
8月22日	3		1
8月23日	2	3	
8月24日	4	7	4
8月25日		2	3
8月26日			2
8月27日		5	6
8月28日	2		1
8月29日	4	3	1
8月30日			3

月日	戦死者数	負傷者数	戦場離脱者数
9月1日			3
9月2日	2	2	
9月3日			9
9月4日		3	1
9月5日			
9月6日			
9月7日			2
9月8日	22	4	4
9月9日			1
9月10日	1	2	
9月11日	2	8	4
9月12日	8	7	1
9月13日			1
9月14日	1	1	1
9月15日	11	3	20
9月16日			6
9月17日		1	9
9月18日		1	2
9月19日			2
9月20日		5	9
9月21日	2		
9月22日	1		2
9月23日			1
9月24日			
9月25日			
9月26日			2
9月27日		3	6
9月28日			2
不明	2	5	
合計	161	178	208

〈表7〉戦場離脱者の原因

原因	人数
下血煩	1
下痢	3
眼病	5
脚気	7
胸痛	1
健忘煩	1
腰痛	1
塞癆病	1
塞煩	1
痔疾煩	2
手足不自由	1
腫物煩	4
小瘡煩	4
症気煩	1
上気煩	3
水溜煩	1
足病煩	10
脱肛症	1
長病	1
頭痛煩	2
病気	129
風邪	5
腹痛煩	4
溜煩	2
靈勞煩	1
脇癰煩	1
疳痛煩	2
疳瘰煩	1
瘡血煩	1
□□煩	2
不明	8
総計	207

〈グラフ1〉戦死者・負傷者・戦場離脱者（累計）



である。戦場離脱者は七月の戦争開始当初から見られ、八月十一日以降顕著となる。最も戦場離脱者数が多い日は、境村で激闘がくり広げられた九月十五日である。結果的に戦場離脱者の数は、戦死者や負傷者よりも上回っている。

戦場の秋田藩士たちが、どのような理由を申請して自宅へ帰ったのか、その理由を〈表7〉に集めてみた。

これを見ると戦場離脱者は「足痛」「腹痛」「風邪」「病気」など、様々な体調不良を理由に帰宅したことがわかる。

戦争時に藩士がつけていた日記の中に、前線で体調不良になった様子が書かれたものがある。二つの例を紹介しよう。まずは有志隊長佐藤日向の日記である。

〔史料6〕

一拙者足病先日より一向替無之、別て昨夜終夜痛難儀致候
二付、石塚泰庵相招為見候処、先日とも替り無之趣申

条、今二も出兵有之ても迎も出陣二不相成候趣申条二付、
万一今二も大事有之候ハ、致方無之ニ付、病氣容體書、
石塚泰庵相認持参ニ付則茂^{（つぎ）}申付、久保田え御取合申上
候。

これは慶応四年八月十五日の日記で、佐藤が足痛を書いた
最初の日記である。また同月十七日の日記には、佐藤は監軍
の山本登雲助より呼び出しを受けたが、足病を理由に代理の
片岡三太郎を派遣したとある。そして佐藤は、八月十八日に
有志隊の隊長を辞めることが認められ久保田に帰っている。
その日の日記を見てみよう。

〔史料7〕⁽²⁰⁾

一九ツ時岡谷兵馬拙者代り有志隊長被仰付出張致候趣二て
拙宿え罷越申候。〔中略〕
一拙足病ニ付、明日宅え引取保養候段、荒川久太郎・今宮
大学え権左衛門ヲ以申遣候。〔後略〕

日記を見る限り、隊長を罷免される不名誉や無念さを感じ
ているようには見えない。戦場で負傷したわけではないのに
八月十四日突然足が痛くなったのは、佐藤が後方へ下がりがた
いのだったと考えることができる。

もう一つの事例は戸村大学である。戸村は八月十一日に横

手籠城戦を行うも、落城の際に城門から集団で切り抜け脱出
に成功する。その後九月八日の福部羅の戦いで大敗、そして
九月十一日、境村に転陣して戦いに臨むが、ここで倒れる。
そのことを記した戸村家家臣の青柳暢堂の日記をあげる。

〔史料8〕⁽²¹⁾

一若旦那事、今朝より数度も戦場え駆廻り、此処にて不計
御癲癇、御悶絶之体二て御倒れ二相見得候。此節迎十右
衛門殿・椎名与一郎殿方御介抱、拙者共御付添、種々水
よ薬よと尽力致候得共、殊之外御急症二て更二人事之御
弁無之候。〔中略〕

一若旦那二ハ四五人之御供・御取次役被召連、其場御引取、
船沢二て御休息、薬水相進候得共、今以人事之御弁更二
無之、種々御介抱申上候。此節御東家御陣営へ被召連候
御医者某御頼被致、横山街道二て御診察。翌曉時過山手
御屋敷え御着二相成申候。

戸村大学は九月十一日の朝まで戦場を駆け回っていたが、
突如倒れ悶絶する。家臣は戸村に薬を与えるが、その効果な
く、医者診察を受けて久保田の屋敷へ帰ったとある。

戸村の症状は、仮病というより前線の兵士が罹る戦争神経
症⁽²²⁾に見える。

戦場離脱者の増加は、藩庁においても問題視しており、今

宮大学軍の陣場奉行兼小荷駄奉行を勤めた西宮長之進は、八月二十九の日記に家老から次のような通達が来たことを記している。

〔史料9〕⁽²³⁾

覚

諸手出足先よりは是迄諸頭并輕卒に至迄病氣ニ付罷帰候もの数多有之、勿論其軍將頭々におゐても吟味之上不得止之向ニ限り差返候儀にも可有之候得共、向後之儀ハ病軀形申立候とも、容易ニ御暇不被相済候様可被成候。夫共精々吟味之上無撓分ハ、御医者を以病症見届之上可被差返候。尤此表へ帰陣之上ニも御吟味之旨も有之候間、此旨兼て一同へ可被申渡候。以上

八月

この通達は、様々な病気を申し立てて帰宅する者が多かったことを物語るものである。通達があつた八月二十九日までの戦場離脱者を（表6）から数えると一七人いる。藩庁では離脱者の数が百人を越えたあたりで、出陣した藩士が病気を装つて帰ってくることを規制しようとしたのである。

〔史料9〕には、どうしても帰りたいという者には医師の診察を受けた上で帰宅を許可するとある。先に見た佐藤日向も戸村大学も前線で診察を受けている。医師の診察なくして

前線を離れた場合、敵前逃亡の疑いがかけられたのであろう。それでは戦死・負傷・戦場離脱の様子を部隊ごとに見ることにしよう。（表8）

この表は慶応四年七月から九月の奥羽列藩同盟諸藩との戦争における出陣部隊と人数、そして各部隊の戦死者・負傷者・戦場離脱者の一覽である。記載データが少ない部隊があるのは、戦争の激化に伴い軍将からの報告が滞つたことや、軍事方の事務量が増加して書き漏らしたためであろう⁽²⁴⁾。

そこで比較的数字のまとまつている部隊の欄を網掛けとしたので、その部隊について見ていきたい。

まず戦死者の割合が大きい部隊は、佐藤日向（二〇％）、梅津千代吉（一九％）、橋本助右衛門（三八％）、戸村大学（三四％）、介川敬之進（二七％）である。

先述した通り佐藤日向が率いていた部隊は、洋式銃を装備した有志隊である。有志隊は、七月十六日、女鹿で庄内藩兵と激しい戦いとなる。この戦いに参加した秋田藩全部隊の戦死者・負傷者の合計は二〇人になったが、有志隊の戦死者・負傷者の合計は一四人にのぼつた⁽²⁵⁾。その後有志隊は、塩越・本荘・道川・長浜と羽州浜街道を北上する庄内藩兵と戦い続けた。〔史料6〕及び〔史料7〕で有志隊の隊長が佐藤日向から岡谷兵馬に代わつたことをあげたが、佐藤が突如足痛を訴え後方行きを願ひ出た背景には、自軍の損害の大きさがあ

る。

梅津千代吉の部隊は羽州浜街道を南下し、八月一日、金浦の戦いに臨んだ。その後庄内藩兵に押されて退却、八月下旬には内陸部雄物川沿いの福部羅に滞陣。そして九月八日の福部羅の戦いでは、梅津千代吉が戦死するほど部隊は壊滅的な被害を受けた。⁽²⁶⁾

橋本助右衛門は刀番で、八月三日、歩行・鷹匠・茶屋番で編制された部隊の隊長になる。そして八月十三日、角間川の戦いに参戦し、部隊は隊長の橋本が戦死する大損害を受けている。⁽²⁷⁾

戸村大学は八月十一日の横手籠城戦、九月八日の福部羅の戦い、九月十日の境の戦いで損害を重ね「史料8」で見たように戦場で倒れ、戸村軍は前線から軍将がいなくなるといふ事態となった。⁽²⁸⁾

介川敬之進は、橋本助右衛門同様八月十三日の角間川の戦いに参戦し、部隊は介川が戦死するほどの損害を受けている。⁽²⁹⁾

続いて負傷者を見る。負傷者数の割合が大きい部隊は、佐藤日向(二四%)、橋本助右衛門(六三%)、茂木筑後(四八%)、介川敬之進(一七%)である。

茂木筑後の部隊は、盛岡藩兵との戦いに備えて十二所口の守備に当たったが、八月九日、十二所を自焼し退却、同月

十二日には扇田で激戦となり、戦死者・負傷者合わせて四二人中、三四人が茂木筑後軍という損害を出している。⁽³⁰⁾

最後に戦場離脱者を見る。この割合が大きい部隊は、佐藤日向(二九%)、小野崎三郎(二二%)、梅津専之助(二〇%)、玉生六郎(一七%)、佐竹将監(六二%)、信太内蔵助(三二%)である。

小野崎三郎は一番手番頭で、一番手軍将洪江内膳軍の別働隊を率いていた。小野崎の部隊は洪江内膳の本隊に従い、羽州浜街道を南下し庄内藩兵と戦うも、次第に退却し、九月十一日の椿台の戦いに参戦している。⁽³¹⁾

梅津専之助の部隊は七月には土崎を警備していたが、八月に入ると横手方面に出陣し、八月九日に局地的勝利を収めた外の目坂の戦いに参戦、その後沢副総督の横手退城に従い大曲、神宮寺へ退却する。⁽³²⁾ その後も沢副総督に付き従って角館へ移っている。

玉生六郎の部隊は、八月三日、土崎の警備の任に就き、その後刈和野、強首、峰吉川と拠点を警備した。そして九月十日、境村の戦いに参戦している。⁽³³⁾

佐竹将監の部隊は、八月五日、藩主佐竹義堯の出陣に際し編制された部隊である。⁽³⁴⁾ 同月十六日に藩主は帰城するが、佐竹将監の部隊は戦場に残った。そして九月の境村の戦いに参戦している。⁽³⁵⁾

負傷者数の割合	戦場離脱者数	戦場離脱者の割合	戦死・負傷・戦場離脱者合計	戦死・負傷・戦場離脱者割合	要因
0%	2	8%	2	8%	
17%	11	8%	41	30%	
24%	14	29%	36	73%	7/16 女 鹿 (4 人)・ 8/1 関村 (3 人)
5%	13	9%	28	19%	
11%	20	10%	55	27%	
	6	12%	6	12%	
14%	21	21%	39	40%	
67%			3	100%	
4%	2	1%	17	12%	
2%	11	20%	15	27%	
			1	100%	
	4	67%	5	83%	
7%	9	10%	32	35%	9/8 福部羅 (16 人)
7%	8	17%	11	24%	
9%			8	14%	
			4	57%	8/8 岩崎 (4 人)
25%	1	25%	3	75%	
63%			16	100%	8/8 柳 原 (1 人)・ 8/13 角間川 (5 人)
	1	25%	1	25%	
33%	1	33%	2	67%	
50%	1	25%	3	75%	
	1	33%	1	33%	
8%	24	62%	34	87%	9/14・15 境村 (7 人)
29%	3	43%	5	71%	
6%	7	4%	23	15%	
	1	5%	1	5%	
25%	2	50%	3	75%	
7%			17	14%	
3%	11	31%	18	51%	9/8 福部羅 (5 人)・ 9/15 境村 (1 人)
7%	1	7%	6	43%	8/12 十二所 (2 人)・ 9/20 比内 (2 人)
14%	1	2%	29	50%	8/11 横手 (16 人)
33%	1	33%	2	67%	
48%			11	52%	
13%	8	10%	31	40%	8/13 角間川 (8 人)
			1	17%	
			2	67%	
	2	10%	2	10%	
	1	6%	2	12%	
13%			1	13%	
			2	7%	
	5	9%	5	9%	
10%	15	19%	23	29%	
9%	208	10%	547	26%	

〈表8〉部隊ごとの死亡者・負傷者・戦場離脱者数

No	軍将・隊長名	出陣日	記載データ数	戦死者数	戦死者の割合	負傷者数
1	宇都宮四郎		25			
2	荒川久太郎	7月6日	135	7	5%	23
3	佐藤日向→岡谷兵馬	7月6日	49	10	20%	12
4	古内左惣治（真壁安芸代）	7月7日	147	7	5%	8
5	波江内膳	7月7日	203	13	6%	22
6	波江武之助	7月7日	50			
7	小野崎三郎	7月7日	98	4	4%	14
8	中安泰治	7月7日	3	1	33%	2
9	梅津小太郎→石塚富之助	7月7日	142	10	7%	5
10	梅津専之助	7月7日	55	3	5%	1
11	茂木秀之助	7月7日	1	1	100%	
12	小田野刑部	7月13日	6	1	17%	
13	小鷹狩源太	7月14日	1			
14	梅津千代吉	7月17日	91	17	19%	6
15	玉生六郎	7月25日	46			3
16	佐竹三郎	8月1日	56	3	5%	5
17	大山若狭	8月1日	7	4	57%	
18	瀬谷和三郎	8月2日	4	1	25%	1
19	橋本助右衛門	8月3日	16	6	38%	10
20	町田小一郎	8月3日	4			
21	波江兵部	8月4日	3			1
22	惟神隊	8月5日	4			2
23	屋形様付き	8月5日	3			
24	佐竹将監	8月5日	39	7	18%	3
25	小野岡右衛門	8月5日	1			
26	大越源十郎	8月5日	1			
27	今宮伊豆	8月8日	7			2
28	塩谷弥太郎→今宮大学	8月8日	157	7	4%	9
29	梅津隼人助	8月8日	21			
30	和田小太郎	8月8日	4			1
31	佐竹大和	8月8日	122	9	7%	8
32	信太内蔵助→金 保太郎	8月9日	35	6	17%	1
33	須田政三郎	8月9日	14	4	29%	1
34	戸村大学	8月10日	58	20	34%	8
35	多賀谷長門	8月10日	3			1
36	茂木筑後	8月11日	21	1	5%	10
37	介川敬之進	8月12日	78	13	17%	10
38	小野寺主水	8月14日	8			
39	介川作美	8月16日	1			
40	小場小伝治	8月16日	6	1	17%	
41	箭田野民部	8月23日	29			
42	佐竹河内	8月24日	3	2	67%	
43	若殿様御供	8月24日	20			
44	平尾島村守備	9月6日	5			
45	四ツ小屋村守備	9月12日	7			
46	和田掃部助	9月12日	23			
47	新屋守備	9月25日	5			
48	戸嶋村守備	9月27日	5			
49	岡 誠之助	9月28日	2			
50	小荷駄方	-	52			
51	西国諸藩付き	-	17	1	6%	
52	農兵	-	8			1
53	藩庁軍事御用	-	30	2	7%	
54	なし	-	58			
55	不明	-	78			8
	総計		2067	161	8%	178

これを見ると、戦場離脱者が多い部隊は二つのタイプに分かれることがわかる。一つは佐藤日向や信太内蔵助の部隊のように、七月の早い段階から出陣し、戦死者及び負傷者を多く出した部隊である。このタイプの部隊に属していた藩士は、銃弾が飛び交う中で戦死する戦友や、手痛い傷を負い後方へ搬送される戦友を見続けたことになる。激戦をくぐり抜けた藩士が体調不良を訴える。ここに戦場の悲惨さに耐えられない人間の弱さを見ることができるといえる。

もう一つのタイプは、玉生六郎や佐竹将監の部隊のように、それまでの拠点警備から、いきなり決戦に参戦した部隊である。戦歴のない藩士があれこれ理由をつけて部隊からいなくなるのは、戦争の恐怖からである。とりわけ佐竹将監の部隊は、戦争離脱者が相次ぎ、六二%の藩士がいなくなっている。人事記録から秋田藩戊辰戦争を見ると、秋田藩の戦力低下の様相が見えてくる。すなわち、秋田藩は決戦で敗北を喫し、そこで戦死者と負傷者を出し戦力を低下させる。その後、決戦を生き延びた人たちが体調不良を訴え帰宅したことで、ますます戦力が低下したのである。

戦死者・負傷者・戦場離脱者の合計が、戦場からいなくなる人の合計である。この合計を見ると、秋田藩各部隊の消耗率は多くの部隊で三割を超えている。部隊から三割の人がいなくなる。この時点で、部隊は部隊の体をなさなくなったの

ではないだろうか。そう考えると、秋田藩各部隊は戦争が進むにつれて、統率をとるのが困難な敗残兵の集団と化していき、海路西南諸藩から送られてくる援軍なくしては戦えないほど戦力が低下したと考えられる。

5 戦力回復の実際

秋田藩では八月十二日、次の触を出して、武士への身分上昇を約束して戦争への動員を図った。

〔史料10〕³⁾

輕輩并百姓・町人至迄出陣致度ものは可申出被仰渡候事

覚

此御場合を奉存、御家中諸士は不及申、輕輩并百姓・町人至迄出陣致度もの、諸士は御評定所、其他は支配々々おゐて早々可申出候。尤高名手柄於有之は、右之通御恩掌可被下置候事。

一頭分打捕候ものは、各段之御恩賞可被下置候事。

但、其証拠無之ては御取揚無之、輕輩并百姓・町人にて右手柄有之候は、武士に可被召立候事。

一諸士二三男働方吟味之上可被召立候間、於頭二取調早々可申出候事。

一討死之者えは右討死之次第に寄、右吟味を以禄高又は金

子可被下置候事。

但、二三男之者は身寄を以可被立下候。

一争戦に及候上は不及申、敵を見懸未戦二引退候者は、無用捨可行軍令候事。

右之趣出兵向えも嚴重可被申渡候。

八月

于時慶応四年辰八月十二日、於御会所御張出を以被仰渡候。

この法令が出た八月十二日は、藩領南部では十一日の横手籠城戦の翌日、藩領北部では扇田で戦いがくり広げられている日である。藩庁上層部は、藩領南北で攻勢に出た奥羽列藩同盟諸藩の部隊をくいとめるために兵力を増強する必要に迫られたのである。しかも敗戦が続いたことで、各部隊から藩士がいなくなる問題も起きていた。この法令のねらいは、まさに員数の確保だったといえる。

武家の二男・三男はともかく、身分上昇を夢見て戦争に身を投じる農民や町人を藩はどのように戦力化しようとしたのか、その實際を〈表8〉から確認すると、秋田藩の兵力増強策は、人がいなくなった各部隊に新兵を補充するのではなく、新兵は新兵で部隊を編成して戦場に投入する策をとったことがわかる。加えて八月十二日の総動員令以降に編成された部

隊は、決戦兵力となったわけではなく、どちらかというと拠点を警備する番兵的な役割を担わされたことがわかる。

ここから、奥羽列藩同盟諸藩との戦争を経るにつれて、秋田藩の部隊は民兵を集い戦力を保持しようとするも、あくまで前線に立ったのは、戦死・負傷者・戦場離脱者を出して戦力を低下させながらも戦場での経験を積んだ部隊であったということが指摘できる。

次の史料は、中安泰治の慶応四年八月二十二日の日記であるが、ここに戦場では民兵があまり役に立たなかったことが書かれている。

〔史料11〕

一境村唐松山光雲寺・角館大林山自在院罷越、是迄信太内藏之助先手え被属置罷有候得共、只番兵のみにては格別之勤方は可申様無之ニ付、御手え属し粉骨之働仕度趣申出候得共、一旦内藏之助殿え属し候上は〈抹消〉素人御越シ候逆致方無之趣申談候。〈訂正〉勝手ニ他え属し候事不相成趣申論候。

中安の所に信太内藏助軍に属した二人の僧が現れた。僧らは、信太軍では番兵ばかりやらされ手柄をあげることができないので中安軍に移りたいのである。これに対し中安は、勝手に他の部隊へ属することはできないと諭したとある。

しかしこれは訂正文言で、抹消された墨塗の部分をよく見ると、素人が来ても何も役に立たないと書いてある。恐らくこちらが中安の本音であろう。

大仙市所蔵高階家文書には、戦場で逃げ惑う信太軍の僧の記述がある。

〔史料12〕^③

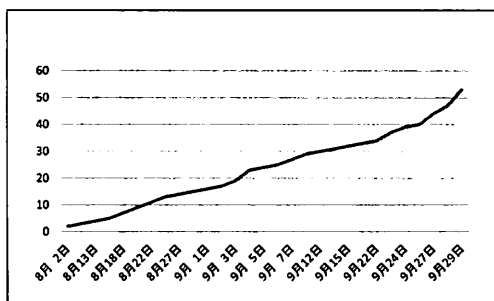
今日朝より争戦相聞、実二信太のほふちかへり杯ハ御用
ニ立不申候。馬鹿面いたし引上ケ被出候。

身分上昇を約束して武士以外の人を戦場に送り込んでも、期待通りの戦力にはならない。そうなると残された手立ては、戦場離脱者の戦場復帰のみとなる。果たして一度後方に下がった者が、再び戦場へ戻ったのか。この疑問を探るべく軍事方の日記から、その数を拾い上げ累計をグラフ化してみた。(グラフ2)

その結果、戦場離脱者の約四分の一に相当する五二人しか戦場に戻らなかったことが確認できた。戦場の恐怖から体調不良となり帰宅した人は、再び前線に立とうとはしなかったのである。足痛を理由に前線を離れた佐藤日向もその一人である。

武士でありながら、戦場離脱者が戦場に戻らない。ここにも戦場の恐怖に耐えられない人間の姿を見ることができる。

〈グラフ2〉戦場復帰者数（累計）



おわりに

本稿では慶応四年（一八六八）戊辰戦争時に軍事方の役人がつけていた日記から、出陣藩士二一八二の行動をデータ化し、それを部隊編制、出陣藩士の動向、戦力回復の視角から秋田藩戊辰戦争の特質を探ることを試みた。

その結果、出陣部隊の編制については、出陣の辞令には幹部と戦士の間に時間差があり、この時間差を利用して部隊編

成の当初人事案から必要・不必要な藩士の入れ替えが行われたことがわかった。また戦士クラスの藩士が出陣することを知らるのは出陣直前であったため、彼らは武器や従者を揃えることができないまま出陣したこともわかった。

次に人事記録から出陣藩士の動向を見ると、戦死者・負傷者の数よりも体の不調を訴え戦場を離脱する藩士が多かったことが確認できた。秋田藩の各部隊が戦力を減らしたのは、敗戦による死傷者数の増加もさることながら、生き残った人が体調不良を訴え前線からいなくなるという要因が大きかったのである。

敗戦が続く中で、秋田藩は農民・町人や藩士の二男・三男を戦争に動員しようとするが、戦力が減退した部隊に新兵を補充するのではなく、新兵により編制された小部隊を送り出す策をとった。また、新兵で構成された部隊の役割は拠点警備であり、前線には送り込まなかった。中には玉生六郎や佐竹将監の部隊のように、拠点警備兵として出陣したもの、前線の後退により決戦部隊になる例もあった。しかし玉生・佐竹両隊とも戦闘になるや戦場離脱者が相次ぎ、部隊の体をなさなくなっている。戦歴のない新兵は戦力にならなかったのである。そうすると、戦力回復の鍵は戦場離脱者の復帰ということになるが、一度戦場から帰宅した藩士は再び戦場に出ることを忌避する傾向が見られた。

銃を担う人に焦点をあてるべく人事記録から秋田藩戊辰戦争を見ると、部隊編制の際には出陣する人・しない人、戦場では生きる人・死ぬ人・帰る人といった人の動きがあるのがわかった。このうち、戦争に参加しながら戦闘を続けられずに帰る人の存在は、領内に敵を迎え入れて戦った秋田藩のみの特質なのか、それとも秋田藩に攻め込んできた奥羽列藩同盟諸藩の藩士や秋田に援軍として来た西南諸藩の藩士も同じなのか、今後戊辰戦争研究ではこのことを考えていく必要がある。なぜなら、戦場離脱者の存在が秋田藩のみの特質だということになれば、それは家に帰りやすい環境下で戦っていたからだと説明づけられる。しかし、もし戦争で戦ったすべての部隊に戦場離脱者がいたということになれば、これは人間の本性に関わる問題ということになる。このように新たな問題を提起しつつ、本稿はここで擱筆することにする。

〈註〉

(1) 戊辰戦争時の秋田藩の軍事方の役人は、井口宗翰「御軍事係日記」(秋田県公文書館所蔵 混架びり)、以下資料番号は特に断りのない限り同館所蔵) 慶応四年八月八日条から、次の人物が軍事方の職務を兼帯していることがわかる。

勘定奉行 佐藤時之助・長瀬兵部・小野崎藤四郎・茂木
左司馬・志賀為吉・川崎久左衛門、

評定奉行 介川作美・会田多仲・菊地長右衛門・江間伊

織・加藤敬吉・中川健蔵

財用奉行 石川 束・細川官助・樋口忠蔵

留守居ニて御評定奉行助力 河野総一郎

境目奉行 奥山五平

副役一同

慶応三から四年の「宇都宮孟綱日記」には、軍事方として川尻小一郎・今村喜左衛門・樋口忠蔵・萩庭彦七・川井新三郎の名前を確認することができる。江間時庸「江間時庸日記」(東大史料編纂所Ⅱはよ) 慶応四年七月十四日条に軍事方頭取に藤井此面が就いていることが記されている。会田多仲「日記」(AHS1212) 慶応四年三月一日条に江間伊織・信太房之助・高久祐助が軍事方御用係に任命されたところある。

(2) 従来の秋田藩戊辰戦争研究は、藩論が何度も転換したことを説明することに力点が置かれていた。その基本的文献は『秋田県史第四巻 維新編』(秋田県、一九六一年)である。近年では藩庁内部で政治を主導した人物と思想的背景に着目した研究がなされ、平元貞治に着目した加藤民夫は「幕末秋田藩の政治思想―平元貞治をめぐる三つの思想―」(『秋大史学』四六、二〇〇〇年三月)、「幕末儒者官僚の軌跡―秋田藩平元貞治の場合―」(『秋大史学』五八、二〇一二年三月)を発表している。

また、平田国学派の藩士の周旋活動に着目した天野真志は「幕末平田国学と秋田藩―文久期における平田延太郎(延胤)の活動を中心に―」(『東北文化研究室紀要』五〇、二〇〇八年)、「国事周旋と言路―幕末期秋田藩の政治方針をめぐる対立から―」(『歴史』一一六、二〇一一年四月)を発表している。

(3) 秋田藩の奥羽列藩同盟加盟と離脱については、工藤威「奥羽列藩同盟の基礎的研究」岩田書院、二〇〇二年)が詳しい。秋田藩の戦争の様子は、大山柏「戊辰役戦争史(下)」(時事通信社、一九六八年)が最も詳しい。ただし大山の著述は「秋田県史第四巻 維新編」や「戊辰秋田藩戦記」(『秋田叢書 第四巻』秋田叢書刊行会、一九二九年)に依拠している。

戦争を直接論じたものではないが、農民の軍事負担から秋田藩戊辰戦争を捉えたものに高階敦子「秋田藩戊辰戦争と民衆」(『秋大史学』五一、二〇〇五年九月)がある。

(4) 保谷 徹「戦争の日本史一八 戊辰戦争」(吉川弘文館、二〇〇七年)・青山忠正「日本近世の歴史(6) 明治維新」(吉川弘文館、二〇一二年)・箱石大編「戊辰戦争の史料学」(勉誠出版、二〇一三年)。

(5) 「高階鞆負書簡」四四月二十五日付(大仙市所蔵高階家文書)には、持参した具足が体に合わないと嘆く様子が書かれている。

持参之具足ハとふ考候ても重く、人並の身ニ候得は着用品も致度候得共、追々暑氣ニ相成、肥満之身分実地之進退も思程には出来申間敷やの考ひも有之、とう致候や未タ決し兼罷有申候。

- (6) 戦争直前の秋田藩の軍事改革については、加藤民夫「秋田藩の軍制改革(一)(2)」〔出羽路〕一三一・一三二、二〇〇二年・二〇〇三年に詳し。

- (7) 「砲術稽古及び洋式銃製造に関する書状並びに口上書」〔横手市史 史料編 近世Ⅱ〕横手市、二〇〇九年) 六三七頁。

- (8) 吉川親子の目指した軍事改革像については、吉川忠安の自伝「吉川忠安略伝記稿」(秋田県立図書館 庵113)に詳しく述べられている。

- (9) 「御軍事總草稿」(AS212.1-1-2)・「御軍事方日記写 御軍事總草稿」(AS212.1-56-1~4)・「御軍事總大草稿」〔御用所御軍事總草稿写〕(AS212.1-66-1~4)

- これらの史料は、明治十八年(一八八五)侯爵佐竹義生が秋田藩戊辰戦争史の編纂事業に際して佐竹家の所蔵になったものである。詳しくは、拙稿「戊辰秋田勤王記」〔戊辰秋田戦争記〕成立に関する史料群「秋田県公文書館研究紀要」第十五号(秋田県公文書館、二〇〇九年三月)参照。
- (10) 「軍事方日記写 御軍事總草稿 Ⅰ」(AS212.1-56-1) 二月二十六日条。

- (11) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」正月十六日条、三頁。

- (12) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」四月六日条、一八頁。

- (13) 渋江内膳の部隊で出陣した佐頭(本名不明、日記の表紙に「佐頭」とある)の「庄内御征討出陣日記」には、四月十六日の出陣前日にあたる十五日に辞令を受けたとある。〔秋田市歴史叢書八 戊辰戦争と秋田市〕秋田市、二〇一四年、一六頁) また横手給人の石川教定が大沢口二番手の梅津小太郎軍に属するよう辞令を受けたのは四月二十六日で、閏四月二日に大沢で久保田から来た部隊に合流している。〔横手市史 史料編 近世Ⅱ〕横手市、二〇〇九年、六八二頁)。

このように、戦士に任じられる秋田藩士が辞令を受けて、慌ただしく出陣するのは久保田給人も横手給人も同じである。

- (14) 妹尾五郎兵衛「庄内御征討出張記録」〔横手郷土史資料〕一・一三二頁)。

- (15) 前掲註(10) 史料、二月二十六日条。

- (16) 前掲註(10) 史料、三月二十六日条。

- (17) 前掲註(10) 史料、三月二十六日条。

- (18) 前掲註(10) 史料、四月三日条。

- (19) 「佐藤信昭日記」(東京大学史料編纂所 維新史料引継本Ⅱ 491) 八月十五日条。
- (20) 前掲註(19) 史料、八月十八日条。

(21) 青柳暢堂「横手御籠城・上野出兵・境村御出兵并酒田御出張事跡手控」九月十一日条（横手市史史料編 近世Ⅱ 七四五頁）。

(22) 戦争神経症の病理については、近現代の戦争から論じられたものが多く、代表的な研究として、エイブラム・カーディナー（著）中井久夫・加藤寛（訳）『戦争ストレスと神経症』（みすず書房、二〇〇四年）がある。

(23) 西宮長之進「戊辰役軍中日記」八月二十九日条（戊辰戦争と秋田市）秋田市、平成二十六年三月）五二頁

(24) 前掲註（1）「御軍事係日記」慶応四年八月十三日条を見ると、家老岡本又太郎へ、軍将が指揮下にある藩士の軍功を報告しないので、雛形を示して提出するよう求めている記述がある。

一タ後（岡本）又太郎殿へ拙者申上候は、大将并諸隊長より戦争之次第報知早速無之候故、早々其節報知致候様被仰渡被下度段申上候所、可申遣故取調申上候様被仰含、左之通書取申上候所、御物書へ直々申付遣候様被仰含候二付、御物書高井猪太郎へ申含候。

雛形

先頃より度々被仰渡候通戦争相済候否戦争之大略・高名・又働き候者、又は討死手負之もの左之通其節々報知可被成候。

雛形

何月何日、何時頃、於何所戦争之次第

勝利

手柄

戦士并並方

同

誰

何人討留

誰

同

誰

殿

誰

手負

疵所何々

誰

但、深手浅手

討死

疵所何方にて討死

誰

右之通、一ト先御届申上候。

何月何日

大将名前

右一ト先御届申上候後左之通

一戦争之次第委曲取調候事

一高名又は働き致候事

一臆病之働き致候事

一分捕品々

右之通取調早々可申上候。

この日記が書かれた八月十九日の戦線は、藩領南部では既に横手城が落城し、仙北郡神宮寺村（大仙市）を防衛拠点にして庄内・仙台藩兵の北上を阻止、浜街道では羽根川（秋

田市下浜)で北上する庄内藩兵を撃破、大館方面では大葛村で盛岡藩兵と交戦という具合に、浜街道以外では劣勢に立たされていた。井口が家老に対し軍将からの報告を求めたということは、戦争の激化に伴い、各軍将は報告どころではなくなくなっていることを示している。

- (25) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(新屋口)」七月十六日、二五〇頁。
- (26) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」九月八日条、一五六頁。
- (27) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」八月十三日条、一二四頁。
- (28) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」九月十日条、一五九頁。
- (29) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」八月十三日条、一二四頁。
- (30) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(下筋)」八月十二日条、二六三頁。
- (31) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(椿台口)」九月十一日条、二三八頁。
- (32) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(院内口)」八月十三日条、二〇一頁。
- (33) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(椿台口)」九月十一日条、二三五頁。
- (34) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記」八月五日条、一二二頁。
- (35) 前掲註(3)「戊辰秋田藩戦記(椿台口)」九月十二日条、二二九頁。
- (36) 「秋田藩町触集(下)」二七四四。

- (37) 中安泰治「陣中日記」(AS212.157)八月二十二日条。
- (38) 「助蔵書状」(大仙市所蔵高階家文書46)。